

優秀修士論文概要

古代東国の塔跡からみる国分僧寺の伽藍配置の成立

高 橋 亘

はじめに

大化元年(645年)の乙巳の変以降、日本では律令制を基軸とした天皇中心の中央集権国家が確立していく。その過程で、仏教は国家政策と結びつきを強め、庇護の対象となる。国分僧寺は国家の統一的な思想を基に発願される一方、実際に建立された国分僧寺は多様な伽藍配置をとる。修士論文では、この多様な伽藍が成立する背景に迫るべく、東国の塔跡に着目し、国分僧寺以前の伽藍との比較を行った。

第1章 研究史と課題

第1節 伽藍配置の既往研究

古代寺院の伽藍配置研究は、戦前から今日まで連綿と続けられてきており、膨大な蓄積がある。本節では、伽藍配置の研究を3時期に区分して概観した。

- (1) 第1期 1900年～1955年 第1期は伽藍配置研究の黎明期で、当該期の伽藍配置研究は地上の観察(現存の古代寺院)から類型が設定され、議論が行われた。発掘が盛んでなかったため国分僧寺の伽藍配置の分類に関する具体的な議論には、至らなかった。
- (2) 第2期 1956年～1990年 第2期は、発掘調査の増加から多様な伽藍配置が確認された時期であり、従来のタイプの再整理と発展に研究の主眼があった。国分僧寺の伽藍が全国で検出されたが伽藍配置の議論についてはまだ、初期の段階であった。
- (3) 第3期 1991年～現在 第3期は国分僧寺の伽藍配置について新たな分類案が提示されるなど、基礎研究の進展が見られる。しかし近年、古代寺院の伽藍研究は伽藍配置以外に視点が移行しつつあり、伽藍配置研究は下火になっている。

第2節 塔の既往研究

- (1) 塔の基礎研究 塔の起源や変遷過程を解明する研究は、戦前から連綿と続けられてきた。基本的には、現存する木塔を対象に研究が進められている。
- (2) 塔の復元研究 数少ない現存する古代の木塔の調査を基に、基壇跡から塔を復元する研究が建築史学者・美術史学者を中心に古くから継続的に行われてきている。
- (3) 塔跡の研究 心礎や舍利埋納、基壇の構築方法などの研究が、古くから継続的におこなわれてきている。
- (4) 心礎の分類研究 心礎は、地上に露出しているものが多いため古くから分類研究が進められてきている。

第3節 論点の整理と課題

古代寺院は、戦前から様々な分野によって扱われてきており、多角的かつ膨大な研究の蓄積がある。しかし、8世紀中ごろに全国で一律に造営されたはずの国分僧寺が、多様な伽藍配置をもつ要因は未だ分かっていない。

これを明らかにするためには、国分僧寺伽藍の成立の背景を探る必要がある。しかし、古代寺院の伽藍配置研究は現存する寺院を対象としていた（第1期）のに対し、国分僧寺の伽藍配置研究は発掘調査成果を中心としている（第2期）ため、両者に乖離が生じている。その結果、古代寺院において国分二寺の造営は大きな画期であったことは明らかになっているが、伽藍配置からそのパラダイムシフトは見いだせていない。

そこで、修士論文では国分僧寺と国分僧寺以前の伽藍配置の比較を通して、国分僧寺伽藍の特徴や共通性を捉えることを目的とした。特に、国分僧寺以前の伽藍配置と国分僧寺の伽藍配置で、大きく様相の異なる「塔」の分析を中心に行った。本論では東国の仏塔の分析を通して、全国的に見ても多様な様相を持つ東国国分僧寺の伽藍配置成立の背景を考察した。

第2章 分析視角

第1節 分析目的

国分僧寺の伽藍配置の成立を解明するには、①造塔の背景、②塔の規格、③伽藍における塔の平面的位置、の変遷と展開を把握する必要がある。よって、①造塔意識の変容の考究、②塔の規格性や変遷の考究③塔のモニュメント性（視認性）の分析を通した、伽藍配置と塔の平面的位置の関係性の考究を目的とする。

第2節 分析対象

全国の国分僧寺の中でも、特に多様な様相を示す東国の国分僧寺を対象とした。また、その成立背景を探るため、東国の国分僧寺以前の寺院も扱った。特に、東国の古代寺院のうち塔と金堂が存在し、それらの位置関係が明らかな寺院、合計24寺を対象とした。本文では、これらの対象寺院の概要（推定創建年代や位置など）を列挙したほか、伽藍・塔跡・心礎の図面を示している。また、各寺院の伽藍配置を整理した。

第3章 古代東国の塔跡

第1節 心礎各部位の変遷

- （1）分析の方法 本節では第2章で記述した分析対象のうち、17個の心礎を対象とした。山王廃寺塔心礎や結城廃寺塔心礎など、心礎各部位の機能が推定できるものを参考に、対象心礎の各部位の規模を(A)～(C)に3分類した。また、心礎の規模を年代順に整理し、その変遷を追った。
- （2）心礎の分析 心礎の平面規模を算出しグラフで示したほか、分類した3つの各部位の変遷を表で示し、得られた分析結果を記述した。
- （3）小結 古代東国の心礎は徐々に舍利孔を失いつつ柄孔や柱座などに重点が置かれるようになり、形は簡素化する方向で変化していく。また、国分僧寺に至ると舍利孔は消滅すると考えられる。

古代東国の塔跡からみる国分僧寺の伽藍配置の成立

第2節 塔基壇・柱間の規模と規格

- (1) 分析の方法 本節では、塔基壇（地業）の規模、柱配置のいずれかがある程度解明されている22寺院を対象とし、塔基壇の平面規模及び柱総間、四天柱・側柱の各柱間、基壇化粧などを整理した。
- (2) 塔基壇・柱間の分析 各寺院の基壇・柱間の規模を整理し表とグラフで示した。基壇の規模・柱間に規格性が見られるものを、分類した。
- (3) 小結 ①国分僧寺の塔基壇は、格段に大きくなる。②国分僧寺の塔基壇は、規格性がみられる。③柱間は、通時的に規格性がみてとれる。④国分僧寺の基壇は、切石積基壇が多い。

第3節 塔跡の可視領域と伽藍配置

- (1) 分析の方法 Esri社 ArcGISのViewshed 2を用いて、対象各寺院の可視領域解析を行った。なお、塔の立体的な規模は不明なため、すべての塔に対し三重・五重・七重の可能性を想定したほか、可視領域を近景・中景・遠景の3段階に分けて解析を行った。また、方位ごとに可視領域の比率を算出し、伽藍における塔の位置との関係性を論じた。
- (2) 塔の可視領域分析 可視領域の成果を図面で示しつつ、伽藍配置との連動を記述した。
- (3) 小結 観世音寺式伽藍配置や特殊な伽藍配置では関連が見られないが、法起寺式伽藍配置、法隆寺式伽藍配置には伽藍配置と可視領域が連動する寺院が多く見られ、特に法隆寺式伽藍配置では顕著である。国分僧寺では、東海道の国分僧寺で塔の配置する方位に可視領域の偏差が認められた。

第4章 東国国分僧寺の伽藍配置の成立

第1節 古代東国の塔跡の変遷と展開

分析をまとめると、次のとおりである。①東国の心礎は、舍利孔を失う方向で変遷する。②基壇は、国分僧寺で規格化される。③柱間は、通時的に規格性が高い。④可視領域と塔の平面的な位置は、国分僧寺では連動しない。

以上を踏まえると、東国の仏塔は、塔自体の上部構造などハードウェアはある程度共有されながら展開したが、塔の持つ宗教的意義、ソフトウェアは、共有されずに展開していった側面が強いと考えられず。但し、国分僧寺は仏塔の意義を喪失したわけではなく、従前とは異なる造塔思想へ変容したと捉えることができる。

第2節 塔と金堂の関係の解体・分離

伽藍配置の分析を踏まえると、次のことが言える。「金堂前面の儀礼空間」を確保する意識と造塔の重要性が重なった結果、従来の伽藍配置では類型化できない伽藍が生まれた。つまり、塔と金堂の関係が解体され、国分僧寺では「大官大寺式伽藍配置」や、回廊外に塔が置かれる伽藍配置、陸奥国分僧寺のような塔院をもつ伽藍が成立した。

第3節 東国国分僧寺の伽藍配置の成立

東国の国分僧寺では、従来の伽藍配置と異なる「国分僧寺的」な伽藍が東山道を中心に成立していく一方で、従来の伽藍の要素を多分に含む国分僧寺伽藍が東海道を中心に成立していくという実態が伺える。東国の国分僧寺伽藍が東海道・東山道に沿って異なる展開を示すことは、国分僧寺が律令国家の地

域支配という極めて政治的な影響の中で成立していくことを示唆している。

おわりに

本論では東国国分僧寺伽藍の実態を明らかにし、その成立背景に迫ることができた。その一方で本論の対象が東国に限られているため、地域史の域を出ていないのが現状である。今後、分析対象を広げることや朝鮮半島・中国大陆との比較を行うことが今後の課題である。